

外来語との同音による誤解の二、三例

陳 力 衛

中国へ観光旅行の日本人一同は、どこへ行っても「ここを20分見物しましょう」と、同じことを繰り返している中国人のガイドさんに一言、「きみはワンパターンだね」と。すると、ガイドさんはみるみるうちに顔から血がひくようになった。「ワンパターン」を中国語の「王八蛋 [wang ba dan]」と聞き受けたからである。それが中国でもっともひどく人を侮辱することばなので、一瞬はりつめた雰囲気になった。その場では一応ことなきを得たが、両方にとって相当なショックだった。

中国人の日本語学習者の特徴のひとつは、語彙を習得するときのアンバランスが挙げられる。つまり、和語、漢語、外来語のうち、漢語のほうの習得がわりとやさしいので、自然とその語彙数が増えて好んで使うようになる。その反対は外来語が不得手でその増加の勢いについていけないから、冒頭のような誤解が起ったわけである。

ところが、日本語にはもともと同音語が多くて、日本語学習者を悩ましてきたが、外来語の増加によって新たな同音語を生み出すようになった。いままでの場合、多くは漢字音によってもたらされたもので、同じ読みに違った漢字を当てていたため、話しことばでは誤解が生じやすくても、書きことばではすぐ解消できる仕組みになっている。しかし、外来語の場合は、話しことばでは既存の和語、漢語、外来語と重なるだけでなく、書きことばでもまったく同じ表記のものが二つ以上出てくると、意味の区別がますますつきにくくなるのである。

実は、そういう懸念はすでに三十年前にも出ている。国立国語研究所報

告20『同音語の研究』（1961、松尾拾、田中章夫）では、洋語（外来語）についてこう書かれている。

洋語は、かたかな書きで表記されるので、もし同音語が数多く存在すると、その判別は、かなり難しくなると推定される。しかし実際には、字音語などに比べると、その総数がずっと少ない上、使われる音韻が字音語よりも広い範囲にわたっていてバラエティに富んでいるため、同音語が生じる可能性は、それほど高くないと考えられる。（中略）しかし、今後、洋語がつぎつぎ借り入れられ、その数が増加し、日常生活にも数多く取り入れられてくると、同音語としての問題が深刻になってくることがないとは言えない。そうなると、字音語における同音語の問題は、現行の文章の表記法の範囲では、主として話ことばの場合にだいたい限られているのに対して、洋語では書きことばにおいても、支障が生じる点に注意すべきである。

この三十年間の外来語のすさまじい増加について言うまでもないが、専門用語だけでなく、日常生活まで広く使われている。特に新聞、テレビなどによる伝播は常に時代の先端を走っている外来語のイメージをより日常的に近づけてくれたため、外来語にからんだ同音による誤解も多くなってきた。本稿ではこうした問題を日本語学習者の角度から見て、二、三例を通して検討してみたいと思う。

外来語と和語

いつかNTTのテレビCMを見たとき、画面には少女がいて、なにか思い浮かべる表情で電話をしている。そこで流れたナレーターのセリフは「とーくのひ」だった。聴覚だけにたよれば、それは「遠い日への回想をしながら、昔の恋人の思い出でもしているかな」と納得する。つまり「トークの日」を「遠くの日」と誤解してしまう。

こうして書いてみると、視覚上の確認によって誤解が解消されるはずだ

が、しかし、現代語の表記の現状から考えると、まだはっきりと決められないのである。あたかも「トラバーユ」を「とらばーゆ」（雑誌名）、「ブレイス」を「ぶれいす」（新聞のテレビ欄）とするように、普段片仮名で表記されたものをわざと平仮名に書き換えて、人々の目をひきつける常套手段があるからである。

こういう誤解の根底には、もちろんそれなりの理由がある。外国人の日本語習得は当然ながら基礎文法と基本語彙から入ってだんだんと語彙量を増やしていくのだが、そこで新しい外来語を耳でキャッチしたときの反応として、なるべくすでに習得していた日本語でその音に当てはめて意味をつかもうとするものである。そのとき、もっとも普通のことばの一つ「遠く」は最初に浮かんでくるのも不思議ではない。それだけでなく、文法上でも、日本語の一部の形容詞は形容詞プラス名詞のとき、「遠くの山々」「多くのばあい」などのように使用可能である。更に、意味的にも日本語の「遠い」は時間的にも空間的にも使えるので、「遠くの日」があっても不自然ではなからうか。いつか新聞のCM評論を読んだ覚えがある。「誤解の楽しさ」という題だったらしいが、むしろこの種の誤解を生み出せる広告を賞賛している。あるいはNTTの広告もこういう狙いがあったかもしれない。

しかし、語の結合や文脈などによって誤解の度合いも違ってくるだろう。外来語ではないが、日本に来て聞かないとき、しょっちゅうテレビで「どこそこをカタクソウサする」ときこえてくる。ソウサの意味はひろくまぎれもなく「捜査」だったが、カタクはずっと形容詞の「かたい」の連用形だと思っていた。

かたく禁ずる かたく断る

のように「きびしく」する意味が含まれているわけである。そういう先入観があってこそ、「どこそこをきびしく、くまなく捜査する」と我流に納

得できたのである。ある日、テレビの字幕の「家宅捜査」をみるまでは自分の間違いに気がつかなかった。それは名詞の「家宅」という言葉の意味範囲に中国語と日本語とが差があることにもよるが、中国語ではただ「家」そのものをさすに止まるのに対して、日本語は「家」に限らず、「会社、銀行、商店」などすべて「家宅」に含まれている。「リクルート」も「佐川急便」も「家宅」捜査されてしまう。因みにこのワープロ(OASYS30LX)でも「かたくそうさ」を打てば、出てくるのは「固く捜査」であった。

「トーク番組」のように、形容詞の連用形が直接名詞につかぬという文法法則が働けば、「トーク」を「遠く」へと誤解される可能性がずっと少なくなる。その意味で考えれば、「国会デモ/国会でも」、「都バス/飛ばす」、「アイス/愛す」、「マイル/参る」のような同音語の対は実際には使用上においては誤解の生じる可能性が少ないだろう。とくに助詞、助動詞のついた場合はなおさらそうである。

「トーク」ということばを辞書で確認できたのはわずかここ二、三年のことである。小学館の『カタカナ語の辞典』(1990)では、

トーク (英talk) テレビ番組やステージのショーでのおしゃべり。*
朝日82・10・13「その道のスペシャリストを迎え、トークと歌でつづるワンマンショー」

と例をつけて説明している。「おしゃべり」に関して、日本語はすでに「話す、語る、話し合う、談話、対談、座談、会談」などがあるにもかかわらず、さらに「トーク」の入る余地が与えられていた。それは和語、漢語のあった類語の中に新しいイメージの外来語を取り入れても共存できる日本語語彙の大きな特徴であろう。

外来語と漢語

日本に来る前に野球について全然しらなかった私は、シーズン中に否応

なしに中継を聞かされるうちに、おのずから納得していく言葉がある。

場面は一死二塁、みんなが期待している中で、打球が遊ごろになって、「ゲッツー」というアナウンサーのかん高い声とともに、観衆の溜め息が伝わってくる。

なるほど、それは痛かった。ましてやダブルプレーで、その痛みは倍になるのだから、当然、「激痛」のはずだと思っていた。考えてみても、「そのミスはとても痛かった」と、試合を振り返る監督の言葉の通り、形容詞の比喩的意味は程度副詞の修飾を受けても消えないから、同じ修飾構造の「激痛」もそうなってもおかしくないはずだが。

何人か野球好きの中国人にその「ゲッツー」の意味を聞いたら、なんと十中八九「激痛」の回答が返ってくる。おもわず、失笑。そこで、気がついたのは、中国語では熟語のレベルになっても比喩義がちゃんとついているからではなかろうか。

意味先行の根底にはやはり中国語としての母国語の干渉が考えられる。日本語の「痛い」は程度副詞の修飾が受けられるが、いったん、漢字熟語の一部になると、その比喩的意味が働かず、たんにもとの感覚形容詞としての意味だけが残る。「激」という程度を表わすもっとも流行の語構成要素（激写、激論、激辛など）と合成した「激痛」でも、ただ「はげしい痛み」という意味に止まるだけであった。一方、中国語はこういう場合、例えば、「酷」という程度を表す語構成要素と合成した「酷熱」は、「たいへんあつい」という意味を表すだけでなく、「酷熱的心」（とてもあつい心）のように、熟語の段階でもその形容詞の比喩義を表すことが出来る。（日本語の「酷暑」は「きびしいあつさ」の意味しかない）その意味で中国人の理解として、「痛い」は文の中で比喩意味を表す以上、熟語になってもその意味が残るはずだということであった。むろん、その深層には、中国語の文の構造と熟語の構造の区別がないことが挙げられ、熟語の単位でも

文の延長線にあるから、文で可能な比喩表現は熟語に到っても可能なわけである。日本語はそうではなく、熟語のレベルと文のレベルでは構造が一致しないので、文のレベルで可能な比喩表現は熟語のレベルではいけなくなるのだ。

同じプロ野球の例だが、解説者はある投手のことを紹介していう、
「あの投手はアメリカ留学を経てシンカーを覚えた」

ここの「シンカー」という語をきいて、迷わず頭に浮かんできたのは「真価」であった。その意味は『岩波国語辞典』（第四版）によれば、

真価を認める、真価を発揮する、真価を世に問う。

といったように、「本当の値打ち」から、「本当の腕前」ともとれそうな意味もある。もともとアメリカは野球の本場であるので、そこでの留学を経て、本格的腕前を覚えた、と考えられるのであった。

漢語というカテゴリーの中で、「しんか」という発音と言え、進化、深化、臣下、神火などいろいろあるのに、「覚える」という動詞とくつきやすいのはやはり「真価」であった。同じことは、「ゲッツーをとった」場面を「激痛をとった」とまで理解は行かないのもやはり文脈によるところが大きいと言えよう。

この二例はいずれも話しことばでの誤解だが、厳格にいうと、それぞれ表記上ではもともと違っていたし、音韻的にもすこしずれがある。

ゲッツー 激痛（げきつう）

シンカー 真価（しんか）

前者は表記上では本来「劇痛」とされていたが、「劇」と「激」が日本語では漢字整理のため、相通ずるようになったが、中国語では「劇痛」しかない。音韻上では促音によって区別がつくはずだが、「げきつう」の場合も促音を生じる可能性があるので、意味先行によって、「激痛」が浮かんでくるわけである。後者の場合はただ長音の有無だけで、実際話している

ときは区別がつきにくい。

「ゲッツー (get two)」も「シンカー (sinker)」も米国から取り入れ、前者は連続した一つのプレー中に二人をアウトにすることだが、後者は投手の投球が打者の前で沈むように落ちる変化球という。少々専門的ではあるが、シーズン中に頻繁に耳にすることを考えれば、いつか「ピンチヒッター」「リリーフ」と同じように日常用語に入ってくることも予想できる。

外来語と漢語との同音はそのほか数多くある。よく挙げられているのは「ソーセージ／双生児」「ソーダ／操舵」「センス／扇子」「コード／高度」などである。が、助詞や助動詞のつく具合から見ると、後の二対が誤解されやすい。

かれは (絵の) センス／扇子 がある

コード／高度 が違う／ある

しかし、実際には「センス」と「扇子」とはアクセントが違うので、ある程度その誤解が解消されるだろうが、「コード」と「高度」とはアクセントも同じで、使い方も似たようなところがあるから注意すべきである。

外来語と外来語

トラック競技に移った次の日は雨だった。

の場合、一瞬道路で走っているトラック (truck) による競技だと誤解する人は中国人だけでなく、母国語による干渉と関係なく一般の学習者にも起こりうることである。これは冒頭にも述べたように、前の2例と質的な違いがある。表記上では全く同じなので、音はもちろんのこと、形も同じだから、話しことばでも、書きことばでも誤解の確率が高くなると考えられる。

バス (bus, bath, bass)

バレエ (ballet, volley)

ロック (rock, lock)

ライト (right, light)

このような外来語同士の同音化を形成する原因として、大抵次の二つのことが考えられる。一つは外国の原語そのものが別語形をしながらも、発音が同じなので、日本語になるとき、外来語としても同じ語形となる。例えば、

night (夜) [nait] ナイト

knight (騎士) [nait] ナイト

これはむしろ極少なくて、多くは前に挙げたような違った原語の発音をもつ語（あるいは発音は近いが、一応区別された二語）を一つの形にしたものである。つまり、外来語の同音は、日本語の音韻組織に組み入れられるべく、その限られた範囲内での改造によって生じたのである。

上に挙げた外来語との同音による誤解は単に単語習得量の不足によるものだと片づけられがちだが、母国語による干渉や日本語文法による類推なども見逃せない原因の一つと考えられる。近頃「誤解のメカニズムの記述をめざして」（『日本語学』1992・12）といった研究も見られ、聴覚などの場面による誤解の解明は音韻、文法、語彙に限らず、言語習得者の社会背景をも重要視しなければならないので、大変な作業になるのだろう。その意味でここに挙げた二、三例はその一助になれば幸いだと思う。